

「すりーばんと」

深澤 伊吹己

## 登場人物

吉川華（はな）（26） スポンジ会社の社員。野球未経験。  
野尻秋則（27） バッティングセンターの従業員。元高校球児。

須藤大地（17） 高校球児。天才スラッガー。

大久保（58） 野尻の働くバッティングセンターの店主。

小林（48） 華の上司。ふわふわファイターズ監督。

今橋（31） 華の会社の先輩。野球経験者。

大村（57） 華の会社の上司。腰痛持ち。

由実（24） 華の会社の後輩。元リトルリーグ。

○東京郊外、河川敷の風景

休日、午前の河川敷。

散歩する老夫婦やランニングする中年男性、バドミントンをする親子などがいる中、グラウンドにはユニフォームを着て草野球をする大人たちの姿。

○河川敷・グラウンド（昼）

点数看板にはテキトウな字で、『ふわふわファイターズVSウオッシュメン』と書かれている（試合は6回表。2対3でウオッシュメン先攻）。守備をしているウオッシュメンのメンバーは何人もあくびをしており、ふわふわファイターズのベンチではお喋りが繰り広げられている。バッターボックスには大村（57）。ベンチから小林（48）のヤジが飛び、小林「大村さん、本気で振ると危ないよー」小林の隣にいる今橋（31）。

今橋「え、大村さんどっか悪いんですか？」

小林「腰、腰。先週ぎっくりやっちゃって。」

運動控えるようになって言われたんだって」

今橋「マジっすか？（大村に）無理しないで

下さいよー」

大村「だいじょぶ、だいじょぶ」

ボールが来て、思い切り振る大村。

と、腰を痛め、膝から崩れ落ちる大村。

ヘラヘラ笑っている一同。

小林、手に持っていた紙コップのコー

ヒーがなくなってるのに気づき、

小林「（あたりを見回し）吉川さん？ 吉川

さーん」

アイスが大量に入ったレジ袋を抱えた

ジャージ姿の吉川華（26）が来て、

華「買ってきました」

小林「（クーラーボックスを見て）こっち入

れといて。それよりコーヒー切れちった」

華「（ポットを見て）さっき足しました」

小林「いやマネージャーなんだからさあ」

空のコップをアピールする小林。

小林を睨みつける華、不服ながらも  
コップにコーヒーを入れ、渡す。

小林「ありがと。(一口飲み)……ぬるっ」  
また小林を睨んでいる華。

知らん顔の小林。

グラウンドではヨボヨボの大村があえ  
なく三振。

華「(グラウンドを一度見てから)私も出た  
いです」

小林「ルール知らないんじゃないの？」

華「毎月手伝わされたせいで完全に理解しま  
した」

悩んでいた小林だが、華の睨みに負け、

小林「(審判に)代打、吉川さん！」

華、ブカブカのヘルメットだけ被り、  
手ぶらでバッターボックスへ。

今橋「(笑って)バット要らないんすかね」  
小林「(笑いつつ)吉川さん、バットは？」

華、ベンチに来てバットを受け取り、

華「今日は使います」

と言い、バッターボックスへ戻る。

今橋「明日は使わないんですかね」

小林「な」

と、笑っている今橋と小林。

華、バットを構えるが、両手が離れてしまっており、持ち手も逆。

ベンチメンバーがヘラヘラ見守る中、ピッチャーが振りかぶって……投げる。空振りの華。

が、なぜかそのまま三塁へ走り出す。ちよつとちよつと、と慌てる相手チームのメンバーたち。

真顔で三塁方向にダッシュしている華。

メインタイトル『すりーばんと』

○バッティングセンター・表（夕）

T『一週間後』

○同・受付（夕）

エプロンをつけた野尻秋則（27）、あくびを噛み殺しながら、汚れたボウルをダラダラ拭いている。

しばらくして同じエプロンをつけた大久保（58）がやってくる。

大久保の後ろには金属バット片手にサングラスをした華の姿。

大久保「おはよー」

野尻「おはようございます。（華に気づき）

……え？」

大久保「この前あげたあれ美味しかった？」

野尻「（華が気になりつつ）ああ、めちゃくちゃ美味しかったです。ぽんかん」

大久保「ね、男子の一人暮らしってビタミン不足になりがちだから」

野尻「男子って歳でもないですけど……」。

（華が気になりながらも）すみません、お気遣い頂いて」

大久保「いいのいいの。あ、じゃあ今度レ

バー持ってくるよ。鉄分も足りてないはずだから」

野尻「（困惑しつつ）そう……ですかね？」

大久保「そりゃあそうよ。栄養って思ったより摂るのが難しいんだよ」

後ろでしきりに頷く華。

野尻「……いつもすいません」

大久保「とんでもない」

無言になる三人。訪れる静寂。

しばらくして、

野尻「あの差し支えなければなんですけど」

大久保「ん？」

野尻「（華を見て）どちら様ですか？」

大久保、華を見て、

大久保「ん？ ああ、そうだ。こちら、吉川華ちゃん」

野尻「華ちゃん？」

華「（若干喧嘩腰で）どうも」

野尻「……どうも」

華「あ、この方が野尻さんですか？」



大久保「そう。野尻くん」

華、サングラスを外し、笑顔で、

華「吉川です。よろしくお願ひします！」

野尻、困惑しつつ、

野尻「新しいバイトの方ですか？」

大久保と華、顔を見合わせ、

大久保「え、バイトなの？」

華「（野尻に）そうなんですか？」

野尻「いや僕は知らないですけど」

大久保「違うよ。華ちゃんはあれだよね。

……なんだっけ？」

華「野球教えてくれるって」

大久保「ああ、そうだ。そう、野尻くんさ、

華ちゃんに野球教えてあげてよ」

野尻「はい？」

大久保「いや、最近毎日来ててさ、結構熱心にやってるの。だから教えてあげてよ」

野尻「いやでも」

華「甲子園出てるんですよ」

野尻「そうですけど……。え、目的は？」

華「野球教えてくれるなら教えます」

野尻「そんな交換条件みたいに言われても

……。（大久保に）ごめんなさい、ちよっ

といいですか？」

野尻、大久保を手招きする。

大久保「え？ なに？」

華「私、練習してきていいですか？」

大久保「どうぞどうぞ！」

打席の方へ行く華。

○同・バックヤード（夕）

やってくる野尻と大久保。

大久保「ちよっとなに？」

野尻「誰ですかあの人」

大久保「野球を教えて欲しい華ちゃん」

野尻「だから、その人は誰なんですか？」

大久保「だから野球教えて欲しい……」

野尻「（遮り）店長、浮気ですか？」

大久保「野尻くん昨日まで昼シフトだったから知らないと思うけど、あの子、先週から

いから、毎日来てて」

野尻「毎日？」

野尻「そう。そんで夕方から閉店までずーつと練習してるの。で、それ見てたらいや、こりゃあ誰かに教えてもらわないとダメだつて思つて」

野尻「才能あるつてことですか？」

大久保「見たほうが早い」

バックヤードを出る大久保。

ついていく野尻。

○同・フロア（夕）

野尻と大久保が来る。

ネット越しの打席では既に華がサングラスをしてバットを構えているが、相変わらず両手が離れてしまっており、持ち手も逆。

ピッチングマシンから放たれたボールをひたすら空振りしている華。

野尻「（啞然とし）マジですか……」

大久保「二万」

野尻「え？」

大久保「一日二万使ってるの。これで」

野尻「うち一回200円ですよ。てことは」

大久保「一日100回。で、もう7日連続来てるから……14万？」

野尻「僕の月給より高いじゃないですか」

大久保「（気まずそうに）なんかごめん」

野尻「それはいいですけど……。お金持ちなんですかね」

大久保「もうすぐ破産だって言ってたよ」

野尻「それはマズいですね（と、苦笑）」

規定の球数が終わり、首を傾げながら出てくる華。

大久保「いやあ惜しかったね」

華「やっぱ光ですかね、逆光だから……」

大久保「たしかに。それもあるかも」

華「もういっちょ行ってきます」

大久保「うす！」

華「うす！」

華、打席に戻り再開する。

野尻「なんか仲いいですよね」

大久保「いい子なんだよ。教えてやってよお

高校球児」

野尻「いやでも……」

大久保「時給出すからさ。教えてる間」

野尻「……ホントですか？」

頷く大久保。満更でもない野尻。

ひたすら真剣に空振りしている華。

見ている野尻と大久保。

○三日月の浮かぶ夜空

○同・打席（夜）

球が出終わるが、まだ構えている華。

野尻、隣の打席を片付けつつ、

野尻「（華に）閉店ですよ」

反応せず、構えている華。

野尻、近づいて、

野尻「閉店です」

と、なぜか唐突にフルスイングで素振りする華。

野尻「（当たり前そうになり）危ない！！！」

華「あつ、すいません」

野尻「（呆れつつ）閉店です、もう」

華「あ、もうそんな時間……」

野尻「……で、教える件なんですけど」

華「あ、はい！」

野尻「とりあえず、ユーチューブ見て勉強してきてもらっていいですか？」

華「……」

野尻「不服ですか？」

華「……もつと具体的に教えてもらえると  
思っただんですけど」

野尻「いや、まあそうなんですけど……。とりあえずバッテリーングフォームだけでも」

華「見て分かりますかね？」

野尻「思ってるのとだいぶ違うはずなんで」

華「とりあえず寝ずに勉強してきます」

野尻「あまり無理はせず」

華「了解です」

マイバットを丁寧に拭き出す華。

片付けしつつ、それを横目で見る野尻。

○同・受付（夜）

レジ締めをしている野尻。

華、やってきて、

華「じゃあ、明日からお願いします」

野尻「お疲れさまでした」

華「（大声でお辞儀し）失礼しまあす！」

野尻「（若干引きつつ）はい」

○道（夜）

ボロいママチャリで帰る野尻。

○アパート・野尻の部屋（夜）。

手鍋のうどんを机に持ってくる野尻。

テレビをつけるとスポーツ番組内で

『天才高校生スラッガー・須藤大地』

という特集をやっている。

爽やかな表情でアナウンサーのインタ  
ビューに答える須藤大地（17）。

○テレビ画面（夜）

倉庫を改装した練習場で取材を受けて  
いる須藤。

アナウンサー「このご自宅の専用練習場で

日々トレーニングをなさっていると……」

須藤「両親には感謝しています」

アナウンサー「プロになるのが一番の恩返し

ということですか？」

須藤「まあ、そんなところですね」

微笑む須藤。褒め称えるアナウンサー。

テレビを消し、うどんを食べ出す野尻。

野尻「（一口食べ）アツア！」

○バッテリーセンター・駐車場（日替わ  
り・夕）

華がバットを出し、拭いている。

それを見ている掃き掃除中の野尻。



野尻「今日はここで？」

華「このままいくと生活崩壊するんで。今日は野尻さんに会うためだけに来ました」

野尻「熱心ですね……」

華「寝る時間削って研究したんで」

野尻「眠くないんですか？」

華「その分、日中会社で寝たんで大丈夫です」

野尻「それは大丈夫なんですか？」

華「高校生以来ですよ、机で寝て顔に跡つい

ちやったの」

野尻「そうですか……（と、引いている）」

華「じゃあ、やってみてもいいですか？」

野尻「あっ、はい」

華、バットを握り出し、

華「手は右バッターの場合、左手が下……右

手が上……（と、正しく握る）」

頷く野尻。

華「それで両手は離れずくっつけて……」

と、手をくっつけて握る華。

野尻「うん」

華「それで……」

身体をのけぞらせ、担ぐようにして  
バットを構える華。その構えはさなが  
ら助っ人外国人のよう。

野尻「（啞然として）……」

華、構えたまま、

華「どうですか？」

野尻「……昨日なんの動画見ました？」

華、一旦構えるのをやめ、

華「いや、ちゃんとした人のがいいかなあつ  
て思ってたプロのを」

野尻「プロ？」

華「ドミニカ代表選手のホームラン100連  
発っていうのがあったんでそれ見ました」

野尻「ああ、なるほど……」

華、自信満々にまた構え、

華「変なところあったら言って下さい」

野尻「全部変です」

華「え？」

○同・出入口（夜）

鍵を締め、出てくる野尻。

○同・駐車場（夜）

野尻、自転車が停めてある方へ向かう  
と練習している華の姿。

バットを正しい持ち方で持ち、構えも  
通常の形でひたすら素振りをしている。  
少し迷った末、声を掛ける野尻。

野尻「お疲れ様です」

華「あつ、お疲れ様です」

野尻「帰りますか」

華「あつ、はい」

○道（夜）

歩いている二人。

野尻はママチャリを引いている。

野尻「……目的（と、呟く）」

華「ん？」

野尻「目的。教えてもらえませんか？」

華「生きる目的ですか？」

野尻「じゃなくて、野球やりたい目的」

華「草野球です」

野尻「え？ 河川敷でやる？」

華「はい。うちの会社、スポンジ作ってるんですけど、毎月、得意先の洗剤会社と草野球やってて。でも私、ルールも知らないからってずっとマネージャー役で」

野尻「ああ」

華「でもわざわざ休みの日に河川敷行って、ポットにコーヒー入れたり、アイス買ってきたりとか嫌なんですよ。だからちよつと、ギャフンと言わせてやりたいなって」

野尻「（少し笑って）ギャフン？」

華「……なんかおかしいですか？」

野尻「いや初めて聞いたんで。現実でギャフンっていう人」

華「結構言いますよ、私。週2くらいで言います」

野尻、少し笑い、

野尻「不燃ごみ捨てれる日より多いですね」

華「はい（と、少し笑う）」

× × ×

歩きながら話す二人。

野尻「じゃあその次回の草野球大会に向けて

……」

華「そうです。次んときはもう見てろよおつていう」

野尻「でも……（少し笑い）そんな本気になる必要ありますかね」

華「え？」

野尻「いや、別にいいんですけど……たかが草野球だし」

華、一瞬真面目な表情で、

華「たかが、だからです」

野尻「え？」

華「ていうか野尻さんって何座ですか？」

野尻「……牡牛座ですけど」

華「（微笑み）了解です」

野尻「（困惑しつつ）……」

○駅前（夜）

立ち止まる二人。

野尻「じゃあまた」

華「すいません、送ってもらっちゃって」

野尻「帰り道なんで」

華「あ、そうだ。明日の昼、自主練あるんで  
すけど来ませんか？ 私、マネージャーで

すけど」

野尻「どうですかね……」

華「ダメですか？」

野尻「明日、休みなんで」

華「時給出るんですよね？」

野尻「一応出ますけど……」

華「ホモサピエンスが球投げたり、打ったり  
するの見てるだけで時給が発生すると思え  
ば楽なものじゃないですか」

野尻「（少し笑い）吉川さんホントに野球好  
きですか？」

華「元々は嫌いですよ。歴代彼氏も全員サッ  
カー部です」

野尻「自慢ですか？」

華「じゃ、明日グラウンドで待ってるんで」

野尻「行けたら行きます」

華「（少し蔑んだ目で見る）」

野尻「行きます」

笑顔の華、頷く。

○アパート・野尻の部屋（日替わり・昼）

寝ている野尻、目を覚ます。

スマホを見ると10時半過ぎ。

野尻、若干焦って、支度を始める。

○河川敷の道（昼）

ママチャリを漕いでくる野尻。

グラウンドが視界に入り、止まる。

グラウンドでは今橋や大村、小林を始

めとしたメンバーたちが野球の練習中。

現在は二人一組でキャッチボールをし

ている様子。

○グラウンド（昼）

女性社員・由実（24）とキャッチボールをしている小林。

由実は小林に向けて、華麗なフォームで何回も速いボールを投げ込んでいる。

小林「ナイスボール。いやあ、うまいね由実ちゃん（と、投げ返す）」

由実「ありがとうございます（と、思い切り投げる）」

小林「（キャッチし）さすが元リトルリーグ。もう由実ちゃんがうちのエース！」

由実「えー嬉しい」

大村と今橋が隣でキャッチボールをしており、

今橋「大村さんじゃキャッチの衝撃で腰、崩壊しますね」

大村「バカ言え。ねえ、投げてみてよ」

由実「いいんですか？」

若干痛そうに腰をかがめ、キャッチングのポーズを取る大村。



由実「じゃあ、失礼します……」

由実、豪速球を大村に投げる。

キャッチするが、そのまま後ろに転び  
動けなくなる大村。

へらへら笑っている小林と今橋。

### ○河川敷の道（昼）

華を探している野尻。

しばらくして、ポットにコーヒーを入  
れる一人、ジャージ姿の華を見つける。  
自転車から降りて階段の上の段に座り、  
練習を見始める野尻。

### ○河川敷・グラウンド（昼）

打撃練習をする中、一人、その様子を  
見ているだけの華。

打ったボールが川の茂みの方まで行っ  
てしまう。

ファーストを守る小林、

小林「吉川さん！ とってきてー」

無言で立ち上がり、茂みの方へ行く華。

その様子を見ている野尻、……。

○水飲み場（夕）

ポットやコップを洗っている華。

帰る小林や今橋、由実などのメンバー

たちが通りかかる。

小林「じゃ、お先ね」

華「はい」

由実「すいません、お願いしまーす」

華「うん、また来週」

去るメンバー。一人で黙々と洗う華。

と隣にやってくる野尻。手伝いだす。

華「（野尻に驚き）あっ」

野尻「手伝います」

華「ありがとうございます」

間が空いて。

華「来てくれたんですね」

野尻「ちよつと遅れましたけど」

華「全然大丈夫です。今日の牡牛座は遅刻し

がちって書いてあったんで予想範囲です」

野尻「占いですか？」

頷く華。微笑む野尻。

野尻「……マネージャー役、吉川さん一人な  
んですね」

華「強豪校じゃないんですから。何人もいま  
せんよ」

野尻「たしかに」

華「……途中で新しく会社入った女の子がい  
るんですけど。その子は流石にこっちか  
なーとか思ってたなら、バリツバリの野球経  
験者でした（と、力なく笑う）」

野尻「ああ、あの……」

華「（頷き）歴代彼氏も全員野球部だって  
言っていました」

野尻、少し笑い、

野尻「それはどっちでもいいですけど」

華「ですよね（と、少し笑う）」

ポットやコップを洗い終わる二人。

野尻「ちよつとやってきましたか？ 練習」

華「いいんですか？」

野尻「とりあえずルールの説明から」

華「お願いします」

○グラウンド（夕）

ベンチ前の土にダイヤモンド状の野球

場の俯瞰図が書かれている。

木の枝で外野の位置を指しながら、説

明をしている野尻。

ノートにメモしながら真剣に聞く華。

野尻「で、ここで外野がフライをキャッチし

たら、ランナーは走れるんです。それが

タッチアップです」

華「なるほど」

野尻「アウトにはなるけど、ランナーは進め

るんで、犠牲フライって呼ばれます」

華「犠牲フライ……（と、メモする）」

野尻「大丈夫ですか？ 覚えました？」

華「ばっちりです」

頷く野尻。

野尻「まあ大体こんなところですかね、大まかには」

華「凄い……。野尻さん。私、野球のルール覚えました」

野尻「（苦笑し）おめでとうございます」

華「あ、あとそうだ」

野尻「ん？」

華「なんか野尻さんが得意だったって技があるって店長から聞いたんですけど」

野尻「ああ、それはいいですよ、別に」

華「なんでですか？」

野尻「大したあれじゃないんで」

土に書いてある図を消そうとする野尻。

華「あ、待って下さい。写真撮るんで」

写真を撮る華。

確認すると、華の顔のアップ。

華「あ、間違えた……。」

撮り直す華。待っているだけの野尻。

華「なんでしたっけ……。バ……。バンド？

え、バンド？ バンドって、野尻さん、昔、

バンドやってたんですか？」

野尻「やってないです」

華「その顔はベースですよね、絶対」

野尻「バンドじゃなくて、バント、ですね」

華「ん？ バント？」

野尻「トです。タチツテトのト」

華「バント？」

野尻「そうです。でももう全然、大したやつじゃないんです。知らなくていいやつです」

華「知りたいです」

野尻「いやほんとに」

華「だって、野尻さんはそれで甲子園行った  
ようなもんだって店長言っていましたよ。お

願いします。一生のお願い使うんで」

野尻「大人も使うんですね」

少し考えた後、バットを持つ野尻。

華に落ちていたボールを渡し、

野尻「軽く投げてもらえますか？」

華「はい」

野尻にボールをトスする華。

野尻、右手でバットの芯を持ち、バントの構えを取り、コツンとバントする。勢いを失い、コロコロ転がるボール。

野尻「これです」

華「え？」

野尻「これで甲子園出ました。……ベンチですけど」

華「……これがバント？」

土に書いた図で説明をする野尻。

野尻「例えば、ノーアウトランナー一塁。一点を着実に取りたい場面だったとするじゃないですか。そのときにバッターがバントをします。それがうまくいくと、バッターがアウトになる間にランナーは二塁に行けるんです。これがバントです」

華「バントしたバッターがアウトになる間に……ランナーが次の塁に行く……」

野尻「（頷き）だからさっきの犠牲フライじゃないですけど、犠牲バントとか、あと、送りバントって言われています」

華「送りバント……」

野尻「……まあ、ダサいだけなんでやめたほうがいいです」

無言の華。

野尻「吉川さん」

華、反応しない。

野尻「ダサすぎて気絶しました？」

華「……カッコいい」

野尻「え？」

華「チームのために自分はアウトになるとか、

カッコよすぎます……」

野尻「え？」

華「私決めました。来月の試合、バントで挑みます。野尻さんにバントの真髄を習って、バントでギャフンと言わせてみせます」

野尻「……冗談ですよね？」

目がマジになっている華。

野尻「目、怖いです」

真剣な華、ノートに『バント！』と力強くメモをする。



○河川敷の道（夕）

歩いている二人。

華はエア―で自分なりのバントの持ち方を模索している。

野尻「何度も言いますが、バントしたところでギャフンとなりませんよ、誰も」

無視してバントの構えを模索する華。

野尻「ホームランとは言いませんけど、ヒット目指すとかでいいんじゃないですか？」

華「……」

野尻「あと……。今、科学的には意味ないと思いますよ」

立ち止まる華。真剣に野尻を見る。

野尻「まあ、相手にバントかも……。って思わせたりする心理的な意味はあると思いますけど、データの的には普通に打ったほうがいいのかなんとかって……」

華「（毅然とした表情で）もっと好きになりました。バントの達人になります、私」

野尻「……」

○バッティングセンター・表（日にち経過）

○同・打席（夕）

打席に立ち、来るボールに向かって、  
ひたすらバントをしようとする華。

しかしボールも怖く、全くかすらない。  
ネット裏から見ている大久保。

大久保「バント……」

清掃をしている野尻、大久保に、

野尻「止めたんですけどね」

ひたすら失敗している華。

大久保・野尻「……」

○会社・屋上（日替わり）点描

スーツ姿でバントの素振りをする華。

○バッティングセンター（日替わり）点描

休日。

隣の打席ではしやぐカップルをよそに  
私服姿でバントの猛特訓をする華。

○会社・コピー室（日替わり）点描

野球の解説書片手にコピーする華。

バントの項目を熱心に読む華。

○バスの車内（日替わり）点描

スマホでバントの動画を見ている華。

気づいた点をノートにメモする。

それをスマホで写真を撮る華。

○バッティングセンター・受付（日替わり・夜）

座っている野尻。

打席で一人、バント練習を続ける華を

遠目で見てから、スマホを見る。

スマホには『今日の学習成果です！』

という一文とともに、華からバントに

ついて気づいたことをまとめたノート

の写真が何枚も送られてきている。

大久保、普段着で出てきて、

大久保「じゃ、あと頼むね」

野尻「(スマホをしまい)はい」

大久保「……そろそろ教えてあげれば？」

野尻「いや、教えるのが嫌なわけじゃ……」

大久保「じゃあなんで？」

野尻「……バントやったところで」

大久保「意味がない？」

野尻「……実際、意味なかったですし」

大久保「意味ねえ……」

野尻「バントだけやったところでプロになれるわけないのに……バカですよね」

と、力なく笑う野尻。

大久保「野尻君、僕がバッティングセンターやってる理由って分かる？」

野尻「……分からないです」

大久保「野球ってさ、カラフルなんだよ。守備も色んなポジションがあって。ピッチャーなら速球で押すタイプもいれば変化

球を使う技巧派もいる。バッターだってそうでしょ。1番バッターは足速くて、4番バッターはホームランバッター。足だけ速

ければ代走要員になれるし、守備だけうまければ守備固めには参加できる。これだけそれぞれの強みで勝負できる球技って他にないと思わない？」

野尻「（感動し）……たしかに」

大久保「だからやっぱり素敵だよ、野球は」

野尻「……はい」

大久保「良いこと言うよね、親父」

野尻「え、今のって」

大久保「親、親。親父の言葉。僕はもう、ずっとクリケットやってたから」

野尻「（脱力し）あ、そうなんですか？」

大久保「まあでも、親父のその言葉聞いて、それならこの店潰すのもあれだし、就活とかも面倒だし、ここ継ごうって、そう思ったんだよね」

野尻「……なるほど……」

大久保「あ、そうだ。明日あれ持ってくるね。サボテン。メキシコだとサラダで食べるんだって。きっと栄養たっぷりだよ」

野尻「ありがとうございます……」

大久保「じゃ、おつかれー」

野尻「お疲れ様です」

去る大久保。

野尻、打席にいる華の方を見る。

○同・打席（夜）

華の打席。規定の球数が終わる。

と、後ろから野尻が入ってきて、

野尻「どうですか、調子？」

華「奥深いですね、バントは……」

華、足元に置いてある『バントノー

ト！』と表紙になぐり書きされたノー

トに色々メモをしている。

それをじっと見つめ、意を決し、

野尻「バント借りてもいいですか？」

華「あ、どうぞ」

受け取り、バントの構えを取る野尻。

野尻「まずバットと目線はできるだけ近づけます。ボールの軌道をよく見るために」

華「……え？」

野尻「膝は柔らかく。コースの上下は膝で合  
わせます」

華「……はい（と、メモし始める）」

野尻「そして何より大事なことは……押すん  
じゃなくて……引く」

と、バントを軽く引いてやる動作。

華「押すのではなく……引く……」

野尻「まあ、恋愛と一緒にですね」

華「はい？」

野尻「あ。……冗談です」

華「あ、ごめんなさい」

野尻「いや、大丈夫です」

華「（メモを見つつ）……視線をあわせて、  
膝はやわらかく。押すんじゃなくて引く」

頷く野尻。

野尻「一番遅い速度でいいんで。やってみま  
しょう」

華「はい」

野尻、機械を操作し、マシンを動かす。

華「あ、お金……」

野尻「店長には内緒で」

華「すみません」

ネット裏に行く野尻。

華、真剣にバントの構えを取る。

目線を合わせ、膝を柔らかくして待つ。

華「押さずに……引くッ」

来たボールを引いてバントする華。

バットにあたるボール。

コロコロと勢いを失い、転がる。

驚く華。頷く野尻。

○道（夜）

歩いている野尻と華。

野尻はママチャリを引いている。

華「遅くまですみませんでした」

野尻「いえ」

華「でもできるようになりました、バント。

……めっちゃ楽しいですね」

野尻「なら良かったです」



間が空いて。

華「本当奥深いですね、バントって」

野尻「そうですか？」

華「奥深いっていうか、理不尽っていうか」

野尻「だいぶ意味違いますけど」

華「あれあるじゃないですか、スリーバン

ト」

野尻「おお……詳しい」

華「おかしくないですか？　なんでバントの

ときだけツーストライクで失敗してファール

ルになったらアウトになるんですか」

野尻「普通に打ってればノーカンなのに」

華「許せないです、ホント」

野尻「まあ、ルールなんで……」

華「そうですけど……。あ、あとあれ見たん

ですよ、送りバント世界記録の方の本」

少しテンションが上がる野尻。

野尻「もしかして……」

華・野尻「『明日への送りバント』！」

笑う二人。

華「泣きました、普通に」

野尻「分かります」

華「最高でした」

野尻「（頷き、思わず）なんであんなカッコいいんですかね、バントって」

華「（笑って）やっぱそうだ」

野尻「え？」

華「野尻さん、バント大好きですよね」

野尻「…：腐れ縁ですかね」

華「なんかカッコよくてズルい」

野尻「そうですね…：」

笑いながら歩く二人。

○駅前（夜）

立っている野尻と華。

華「え、いいんですか？」

野尻「せっかくなんで」

華「じゃあ…：明日グラウンド集合で」

野尻「はい」

華「5時半集合で。おやすみなさい」

駅の方へ去る華。

野尻「え、5時半って。朝のですか!？」

聞こえていない華、消えていく。

野尻、ママチャリに乗り、帰る。

### ○野尻の部屋（夜）

テレビがついている。

ダンボールの中身を出している野尻。

高校時代の卒業アルバムや教科書の奥

から、『バントノート』と几帳面な字

で書かれた古いノートが出てくる。

パラパラめくり、見直す野尻。

と、テレビで須藤のニュースが始まる。

アナウンサー「次のニュースです。大注目の

高校生スラッガー、須藤選手ですが、昨日

の練習後、右肩の激しい痛みを訴え診断の

結果、重度のインピンジメント症候群であ

ることが判明しました。これにより来年3

年生になる須藤選手の甲子園の出場は事実

上不可能とも言われており、術後の経過に

よってプロ入りも危ぶまれる事態となり  
ました」

ニュースをぼんやり見つめている野尻。

○須藤の家・倉庫（夜）

倉庫を改装した練習スペース。

ベンチに座ったまま、左手で金属バットを持ち、コンクリートの地面にコン  
コンとぶつけどけだす須藤。

目に涙を浮かべている。

次第に強くぶつける須藤。

左手で持ったバットを何度も何度もコ  
ンクリートの地面に叩きつける。

少し歪んだ金属バットを放り投げる。

○河川敷・グラウンド（日替わり・早朝）

ストレッチしているジャージ姿の華。

目薬を差し、眠気を飛ばす野尻。

野尻「朝、強いんですね」

華「はい。負けたことないです」

頷いている野尻。

○同・グラウンド（朝）

マウンドに立っている野尻。

打席に立っている華。

ひとしきり、バント練習を終えている

様子の二人。

野尻「どうですか、いけそうですか？」

華「やっぱバッティングセンターとは環境が

違う感じはしますね」

野尻「相手も上手いわけじゃないですけど、

その分バントしにくいところに球が来る可

能性も高いので」

華「なるほど」

手にマジックでメモしている華。

メモをし終えて、

華「もう一回いいですか？」

苦笑しつつも頷く野尻。

○コンビニ・表（昼）

出てくるレジ袋をぶら下げた野尻。

○河川敷（昼）

歩いてくる野尻。

下にはバントの素振りをする華の姿。

野尻を見つける華、上がってくる。

華「すいません、買い出しまで」

野尻「いえ……肉まんがいいんですよね」

華「はい」

階段に座る二人。

肉まんを2つ出す野尻。

華「野尻さんも肉まんですか？」

野尻「久々に食べたくなって……。……どうぞ」

華「（受け取り）ありがとうございます」

頂きます、と肉まんを食べだす二人。

フーフー冷ましつつ食べる野尻に対し、

ハフハフしながらそのまま食べる華。

野尻「熱くないんですか？」

華「あつふいでふよ。（飲み込み）でも、熱

いのが美味しいんです」

苦笑いしつつ、頷く野尻。

華「あ、そうだ。野尻さん、今日の占い1位

ですよ。牡牛座」

野尻「……毎日見てるんですか？」

華「うん。でもこの占い水瓶座が一位になったことないんですよ……。昔、水瓶座の人に恋人奪われたのかもしれないです」

野尻「吉川さん、水瓶座なんですか？」

華「うん」

野尻「他の占い見ればいいじゃないですか」

華「そうなんですけどね、……なんかこれがいいんです」

野尻「絶対1位になれないのに？」

華「その分、いつかなれたら嬉しいじゃないですか」

野尻「ちなみに今日は何位なんですか？」

華「11位です。ほぼ毎回12位か、よくて11位です」

野尻「じゃあ今日は一応いい日……」

華「はい。11位なんで」

野尻「……やっぱ見るのやめるべきですよ

(と、笑う)「

華「ですかね（と、笑う）」

○河川敷の道（夕）

駅に向かって歩く野尻と華。

野尻「あ」

華「ん？」

野尻「大したことじゃないんですけど」

野尻、ジャージ姿の華を見て、

野尻「当日もその格好ですか？」

華「あつ……そうですね……」

と、自分が着ているジャージを見る華。

華「マネージャーなんでずっとこれ着てました」

野尻「（頷く）」

華「まあ……私はこれですね。当日も」

野尻「なるほど……」

間が空いて。

華「なんでですか？」

野尻「いや、せっかくならユニフォームの方がやる気出るかなあって」



華「（笑って）野尻さんって、なんかあれで  
すね。たまに優しいですね」

野尻「そうですね……（と、苦笑）」

笑っている華。

なにか考えている野尻。

○バッティングセンター・打席（日替わり・  
夕）

バントの練習をしている華。

○同・受付（夕）

話している野尻と大久保。

大久保、封筒を野尻に渡して、

大久保「じゃあ、さっき言ってたこれ……」

野尻「本当すいません（と、頭を下げる）」

大久保「一生のお願い使われたの、小学生以

来だよ」

野尻「ですよね……」

大久保「そんな生活困ってるの？」

野尻「そういうわけじゃないんですけど」

野尻、練習する華の方を見て、

野尻「（若干感傷に浸りつつ）ちょっと買い

たいものがあって……」

特大のあくびをしている大久保。

それを見て苦笑する野尻。

野尻「一瞬、店番頼んでいいですか？」

大久保「（あくびしつつ）ああい」

○同・表（夜）

バッテリーセンターの打席の照明が

落ち、真っ暗になる周囲。

○同・受付（夜）

最後のレジの確認をする野尻。

それを待っている華。

野尻「行きますか……」

華「はい」

○道（夜）

歩いている野尻と華。

野尻のママチャリのカゴには大きな袋が入っている（中身は分からない）。

華「いよいよ明日か……」

野尻「緊張しますか？」

華「たかが草野球っていうのは分かってるんですけどね……」

野尻「たかが、だから……ですよね」

自分がその言葉を野尻に以前言ったことを思い出し、微笑みつつ、

華「……はい。そういうことです」

○駅前（夜）

立ち止まっている野尻と華。

華「ホント、ありがとうございます」

野尻「いえ」

華「見にまで来てくれるなんて……」

野尻「朝、起きたら、ですけど」

華「了解です」

野尻「（頷き）あとこれ、良ければ……」

と、カゴにある袋を華に渡す。

華「えっ……」

華、開けてみると、新品の真っ白なユニフォームが一式入っている。

野尻「野球小僧みたいなやつしか買えなかったんですけど……」

華「（驚きつつ）あっ……お金……」

野尻「いや、それは」

華「ダメですよ、私から巻き込んだことなのに……」

華、財布から金を出すが、

野尻「店長から貰った臨時の分で買ったんで大丈夫です」

華「あ、この教える……？」

野尻「（頷き）本当はそれも貰わないで買えたらカッコよかったですけど……。 （少し笑い）すみません」

華「いえ……ありがとうございます」

野尻「はい。……じゃあ、頑張って」

華「（笑顔で）はい」

隣をイチャイチャカップルが通る。

野尻「ちよつと寄りましょう」

華「あ……はい」

○河川敷の風景（日替わり・朝）

休日、午前の河川敷。

散歩する老夫婦やランニングする中年男性、バドミントンをする親子などがいる中、グラウンドには草野球をする大人たちの姿。

○河川敷・グラウンド（朝）

点数看板に『ウォッシュメン』『ふわふわファイターズ』と書き込む真っ白なユニフォーム姿の華。

小林と今橋、話しており、

小林「なんだよ、由実ちゃん来ないのかよ」

今橋「彼氏と朝帰りですって」

小林「じゃあ仕方ないね。病気とか仕事なら許せなかったけど」

苦笑する今橋。

看板を書き終え、やってくる華。

小林と今橋、華のユニフォームを見る。

華「……なにか？」

小林「……別に」

と、階段の上にいる野尻に気がつく華。

華「あっ」

走って野尻の方に向かう華。

若干困惑している野尻。

野尻の元までやってきた華。

華「おはようございます」

野尻「……おはようございます」

華「見て下さい、これ」

と、占いランキングをスマホで見せる

華。水瓶座が8位になっている。

華「初1桁です（と、満面の笑み）」

野尻「いけますね（と、苦笑）」

華「うん」

× × ×

試合開始。

両チームが見合って挨拶をする。

端っこにいる華、深々とお辞儀。

野尻は階段の上の方に座っている。

× × ×

試合は3回表。1対1で同点。

華はじっと試合を見つめている。

階段の中段にいる野尻も見つめる。

× × ×

試合は5回裏。2対1で先攻のウォツシュメンが1点リード。

周囲はヘラヘラしているが、試合を食い入るようになっている華。

今橋と小林、華を見つつ、ユソユソと、

今橋「今日、吉川さんがチっすね……」

小林「な……草野球であの目する？」

目を見開き、試合を見ている華。

小林「世界で一人だけじゃない？」

今橋「なんかもう一人いるんですよ、今日」

今橋、野尻の方を見る。小林も見る。

……階段の前の方で立ったまま、試合を食い入るようになっている野尻。

○河川敷の道（昼）

マスクにサングラス姿で歩いている須藤が通りかかる。

草野球に気づき、何気なく見始める。

○河川敷・グラウンド（昼）

そして7回裏。最終回。2対1のまま。後攻、ふわふわファイターズの攻撃。打席には大村。

今橋「腰、気をつけて下さいよー」

大村「今日調子いいから大丈夫そー」

と、手を振っている大村。

が、ボールは大きくそれ大村に直撃。

腰を痛め、膝から崩れ落ちる大村。

審判「デッドボール！」

メンバーに担がれ、ベンチに戻る大村。笑っているチームメンバー。

そして華、いよいよ、一塁コーチのゾーンにまで出てきている野尻を見る。目が合い、頷き合う二人。



華、代走を出していた小林に、

華「代打、行かせて下さい」

小林「え、今？」

華「絶対後悔させないので」

華の燃え盛る闘志に若干引きつつ、

小林「代打！ 吉川さん！」

少しざわついているベンチ。

華、ヘルメットを被り、マイバットを  
持って打席へ。

得意の助っ人外国人打法で構え、ブン  
ブンと思い切り素振りする。

その様子に思わず守備シフトを後退し  
てしまいうオツシユメンチーム。

仲間チームのメンバーも驚いている。  
その様子を見て頷く華。野尻も頷く。

そしてピッチャー……投げる。  
と、いきなりバントの構えをする華。

空振り。ストライク。  
どよめく両チームのメンバー。

今橋「バント？」

守備陣はバントに気がついて前進。

がまた思い切り素振り。下がる守備陣。

2球目、ボール球。

が、またバントで空振りする華。

小林「もう追い込まれちゃったよ」

今橋「バントもう無理じゃないっすか」

それでもバントの構えを取る華。

警戒する守備陣。

今橋「スリーバント……」

小林「（笑って）ミスったらアウトだよ」

息を整えるピッチャー。

セットポジションから……投げる。

華、思い切りボールに近づき、そして、

バットを……引く。

バットに当たるボール。勢いを失い、

サード側にゆっくりと転がっていく。

キャッチャー「サード！」

慌てて捕りに行くサード。

全力で一塁にダッシュする華。

なんとか捕球するサード。

そして、ファーストへ投げる。

ギリギリでベースに駆け込む華。

判定は……アウト。

が、ランナーはその間に二塁に進出。

華「やつ……たあ！！」

送りバント成功。喜びを爆発させる華。

バントくらいで……と引いている周囲。

が、もう一人大喜びする男、野尻。

野尻「吉川さん！」

華「野尻さん！」

思わず勢いでハグする二人。

周囲「……え？」

周囲をよそに感極まっている二人。

野尻「……最高のバントでした」

華「……うん……うん」

冷めた空気を気にせず、ただ喜ぶ二人。

その一部始終を見ていた須藤。

しばらくして、立ち去る。

○雲ひとつない青空

○河川敷・グラウンド（昼）

誰もいないグラウンド。

点数看板の7回裏には0の数字。

（2対1で結局ウォッシュメン勝利）。

○河川敷の道（昼）

歩いている野尻と華。

華「すみません、今日も洗い物まで……」

野尻「良いものを見せてもらったんで」

華「勝ってればなあ……最高だったのに」

野尻「仕事はしたんで。胸張って下さい」

華「はい（と、笑う）」

野尻「（間が空いて）でもなんか……久々に

熱くなりました……。冷静に考えたらこん

なこと……とも思うんですけど」

華「分かんないですよ。野尻さんの指導が私

のバントを変えて、私のバントが誰かの人

生を変えてるかもしれない」

野尻「（笑って）草野球のバントがですか？」

華「はい（と、笑う）」

○須藤の家・前（昼）

待ち構えている取材陣。

やってくるジャージ姿の須藤。

来たぞ！ と取り囲む取材陣。

アナウンサー「須藤選手、怪我からの復帰絶

望的と言われておりますが！」

リポーター「野球から逃げるんですか！」

と、立ち止まる須藤。顔を上げる。

驚く取材陣。一気に静まる。

須藤「……やります。……まだやりたい」

ワツと一気に明るくなる取材陣。

拍手喝采。笑顔の須藤。

○バッティングセンター・受付（日替わり）

座っている大久保と野尻。

野尻はボールを拭いており、大久保は

スポーツ新聞を読んでいる。

大久保、新聞をめくり、

大久保「おっ、須藤君まだ野球続けるって」

野尻「高校生スラッガーの子ですか？」

大久保「家が割とこの近くでさ。昔はうちの店にもよく来たんだよ」

野尻「へえ……」

大久保「頑張ってくれればいいね」

野尻「ですね」

野尻、打席の方へ視線を向ける。

視線の先にはユニフォーム姿でバットを振り回し、空振りしている華の姿。

その様子を見て笑っている野尻。

と、ボールが華のバットの芯に当たる。打球は放物線を描き、ホームランの的に直撃する。

場内アナウンス「ホームラン！ おめでとう

ございます！」

野尻「え？」

笑っている華、野尻に手を振る。

苦笑しつつ、一応振り返す野尻。

おわり